

## いじめとその維持要因に関する研究

岩 見 まりあ<sup>\*1</sup>・大河原 美 以<sup>\*2</sup>

臨床心理学分野

(2016年9月12日受理)

### 1. 問題意識と目的

#### 1. 1 いじめの様相

文部科学省<sup>21)</sup>は、「いじめはどの子供にも起こりうる、どの子供も被害者にも加害者にもなりうる」と述べ、「いじめ防止対策推進法」を公布し、学校などに「いじめの防止等のための対策に関する基本的な方針」の策定を義務づけた。また、国立教育政策研究所<sup>17)</sup>における縦断的な調査には、小学校4年生から小学校6年生までの間に「仲間外れ、無視、陰口」の被害経験が1回でもあった児童が87%、加害経験が1回でもあった児童が86%という結果が示されている。つまり、ほとんどの児童がいじめの被害者・加害者になりうるということがここに示されている。学校現場において子どもの安心・安全感を奪ういじめの問題は、依然として深刻であり、それは特別な問題ではなく日常的に起こっている問題である。

本論では、いじめ加害行為が関係性の中でどのように維持されていくのか、その要因を明らかにする。

いじめに関する先行研究においては、いじめを加害者個人の要因から捉える研究と、集団などシステムの要因から捉える研究とがある<sup>13) 18) 19) 30) 31)</sup>。久保田<sup>19)</sup>は、いじめに関する研究上の課題として、いじめ加害者という「個人」と「学級集団」との関連を踏まえた視点の重要性を指摘している。また、大河原<sup>26)</sup>においても、「教育臨床におけるあらゆる問題は、子どもの個の問題と問題をとりまくシステム（関係性の要因）における相互作用の問題が複雑にからみあっている」ので、問題解決にあたっては、個の問題と関係性の問題

の双方の観点からアプローチを組み立てる必要がある」と論じている。そこで、個の要因と関係性の要因の2つの視点から、いじめに関する先行研究を概観する。

#### 1. 2 いじめ加害に至る個の要因

##### 1. 2. 1 ネガティブ感情に対する脆弱性

いじめ加害者となる子どもたちはいじめ行為を抑制できない状態にある<sup>7)</sup>。いじめ加害者の心身の健康状態は良好ではないことが指摘されており<sup>7) 13) 24)</sup>、いじめ加害者に適切に対応することが、いじめ問題を防止することに繋がるという認識が広がっている。

いじめ加害を行う子どもの背景には、攻撃性の高さや他者に対する敵意的な認知の高さがあるということが先行研究で明らかになっており<sup>1) 12)</sup>、その攻撃性や敵意的認知は、自己に対する存在価値についての感覚の希薄さや、自己への不満というネガティブ感情と関連する<sup>10) 33) 36)</sup>。藤・湯川<sup>10)</sup>は、現在の自分に対する不満というネガティブ感情が、他者からの承認を得られないことを介して、他者に対する敵意的・猜疑的な見方を促進していることを示した。また、谷本・笠井<sup>33)</sup>も、人間への信頼感が低かったり自己存在感が希薄であったりすることが、攻撃性を高めるという結果を示している。

また、いじめ加害者はいじめを行うことで「気持ちがスカッとした」「楽しくなっていった」という気持ちを示していることから<sup>18)</sup>、様々なストレスによるネガティブ感情をいじめという他者への攻撃で発散している可能性が考えられる。

\*1 相模原市青少年相談センター (252-0239 相模原市中央区中央 3-13-13)

\*2 東京学芸大学 教育心理学講座 臨床心理学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

大河原<sup>26) 27)</sup>は、ネガティブな感情が攻撃的な表出となり、制御されない状態を、「感情制御の発達不全」というモデルで説明している。

「感情制御の発達不全」とは、ネガティブ感情を解離させてしまい自己に統合することができないことで、その制御に困難をきたしてしまう状態である。親（や重要な養育者）が子どもの生理現象としてのネガティブ感情の表出を否定的に語り適切な感情語彙を与えないと、その感情は社会化される機会を失い、脆弱性が形成されてしまう。ネガティブ感情が承認されない環境で育つと、子どもは解離反応という防衛により感情を制御することで環境に適応する。しかし、その反動で過覚醒反応が生じて、ネガティブ感情が制御できない（不機嫌・かんしゃく・文句・暴言）状態に陥るのである<sup>28)</sup>。つまりネガティブな感情を親に受け止めてもらえなかった子どもは、不快感情を適切に処理することができず、あふれてくる不快感情をいじめという攻撃性で発散してしまうことが起こるのである<sup>25)</sup>。

これらの研究から、いじめ加害者は、日常の中で感じるストレスや自己に対する不満感、自己存在感の希薄さなどから喚起されるネガティブな感情を適切に処理することができず、そのためそれが他者への怒りや敵意となり、いじめという攻撃性で表出させている可能性が考えられる。

### 1. 2. 2 いじめの被害体験

国立教育政策研究所<sup>17)</sup>は、6年間の縦断的な調査の結果から、被害者も加害者も入れ替わりながら、多くの児童・生徒がいじめの被害あるいは加害を経験しているという点を明らかにしており、また吉川・今野・会沢<sup>35)</sup>においても、被害・加害両方を経験している者が一定数いることが示されていることから、現代のいじめを考える際には加害者が被害を経験している場合を想定する必要があると分かる。香取<sup>16)</sup>は、いじめ経験において被害・加害両方を経験している場合、「情緒的不適応」（イライラしやすくなった、よく眠れなくなった、物事を否定的に考えてしまうようになった、等）「同調傾向」「他者評価への過敏」が加害のみの経験や傍観・仲裁経験者より高く、特に「情緒的不適応」は被害経験者よりも高いことを明らかにした。さらに本間<sup>7)</sup>は被害・加害両方を経験した群は、被害群と無経験群よりいじめ加害願望が有意に高く、自尊感情が加害群・無経験群より有意に低いことを示した。これらのことから、いじめ行為を抑制できない背景の一つとして、いじめ加害者の背景にいじめ被害

経験による傷つきがあることが大きく関係しているのではないかと予想される。

### 1. 3 いじめを維持する関係性の要因

いじめを理解するために不可欠な要素として、芹沢<sup>32)</sup>は「暴力の反復継続」という視点を挙げ、その反復継続性を解くことがいじめを解体するための条件の1つだと述べている。

本間<sup>7)</sup>は、いじめの加害を経験し、さらに現在進行形でいじめを行っている群の自尊感情が高いという結果を示した。そしてその自尊感情の高さは、加害グループ内での良好な対人関係に支えられている可能性があるということを指摘した。

自尊感情は、「随伴性自尊感情」とDeci & Ryan<sup>3)</sup>の示した本当の自尊感情ときわめて近いと考えられる「本来感」という2つの概念から捉えることができる<sup>15)</sup>。「随伴性自尊感情」は、『自己価値の感覚が何らかの外的な基準上での査定に依存し、その基準で高いパフォーマンスを達成すること』<sup>3)</sup>と定義され、本来感は『自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚』<sup>14)</sup>と定義されている。この考えに従って、いじめの加害者について述べると、いじめ加害者は、外的な基準に依らない、自分らしくあると感じていられる程度である本来感は低いが、いじめをする中で集団からの承認を得られたりすることで自己価値が外的な基準に支えられ、一時的に随伴性自尊感情が満たされた状態となるということが考えられる。

また、久保田<sup>19)</sup>は、中学生への調査で「いじめられていた子の反応を見るのが楽しくなっていった」「みんなで一緒にいじめをするのが楽しくなっていった」などの項目を、いじめることに利益を感じる心情として捉え、いじめのエスカレート化との関連を調べている。その結果、家庭内でのストレス発散などがいじめることによる利益の発生に有意な影響を及ぼしており、さらに利益の発生はいじめのエスカレート化に有意な影響を及ぼしていることが分かった。

つまり、いじめをすることによって、いじめ集団の中の一員であるという所属感・承認感から随伴性自尊感情が満たされ、いじめ行為により不快感情の処理・表出がなされることによって、利益が生じ、いじめ行為が抑制できない状態となる可能性が考えられる。

さらに、いじめ加害者の多くに、後悔や罪悪感が生じることが分かっているが<sup>8) 19)</sup>、久保田<sup>18)</sup>によると、いじめ加害時に後悔や罪悪感が生じたとしても、自分の保身や得られる利益のため、いじめ行為に参与せざるをえない、停止や謝罪ができないという点で葛藤状

態となるという。森田ら<sup>22)</sup>や久保田<sup>18)</sup>は、いじめ加害者がこのような葛藤状態に、被害者に原因を帰属させるなどいじめの正当化を行うことで対処しているという可能性を指摘し、D. Matza, G. M. Sykes<sup>5)</sup>の「中和の技術」という理論を用いていじめ行為の正当化のメカニズムを説明している。いじめ加害経験のある大学生へのインタビューによる研究<sup>4)</sup>では、協力者全員が自分のいじめ加害体験について、いじめは悪いことだと認識していながらも「よい経験だった」「被害者にも悪いところがある」などと語ったことが報告されている。また森田ら<sup>22)</sup>も、いじめ加害者は「相手に悪いところがあるから」といういじめの理由の選択率が高いことを示している。これらのことから、いじめ加害者がいじめの正当化をしばしば行っていることが示唆される。

つまり、いじめたことに対して罪悪感が湧いたとしても、自分の集団への所属欲求や自分がいじめられるかもしれない恐怖などにより、いじめ加害者はいじめ行為を正当化することで、いじめを継続してしまう可能性が考えられる。

#### 1. 4 研究仮説と目的

先行研究より、いじめ加害における個の要因には、いじめ被害経験やネガティブ感情を承認されない親子関係という要因があることが分かった。関係性の要因には、いじめ加害行為をめぐって利益や罪悪感が生じたり、いじめ行為を正当化したりする要因があることが分かった。そしてこれらが影響しあうことでいじめが維持されるのではないかと推察された。これらの要因を仮説図として図1に示した。

本論の目的は、いじめ加害が維持される背景についての仮説(図1)を質問紙調査により検証することである。

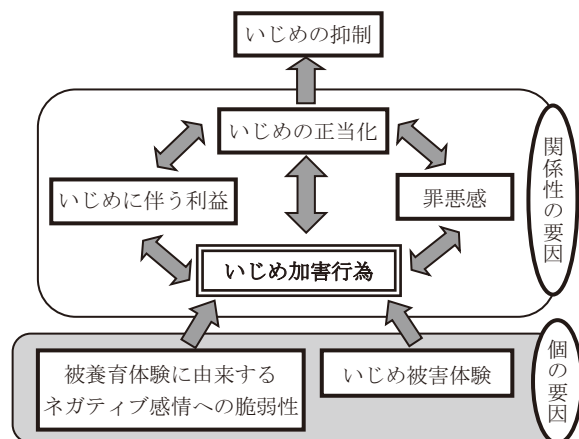


図1 いじめが維持される背景についての仮説

図1の各要因を測定する為に、「いじめ被害体験」「いじめ加害行為」「いじめに伴う利益」「いじめの正当化」については予備調査に基づいて質問紙を自作し、「被養育体験に由来するネガティブ感情への脆弱性」「罪悪感」については先行研究の質問紙を用いた。また、「いじめの抑制」を従属変数とすることで、いじめが維持されたかどうかの指標とした。

## 2. 調査研究

### 2. 1 調査対象者および方法

首都圏の大学生・大学院生431名に協力を依頼。分析対象は欠損や多重回答があった40名を除き、391名(男性155名、女性236名、平均年齢20.58歳)であった。

### 2. 2 調査時期

2014年10月20日～11月14日。

### 2. 3 質問紙構成

仮説を検証する為に使用した質問紙を図2に示し、その内容について以下に述べた。なお質問紙①③④は、表1に示した予備調査により作成したものを使用した。また、フェイスシートには、実施日、年齢、性別の記入、さらにいじめ加害・被害についての認識の有無と、いじめ加害継続の有無について、「はい」「いいえ」の2択で回答を求めた。

#### ①いじめ加害行為質問紙(自作)

今まで所属していた集団(学級や部活など)の中

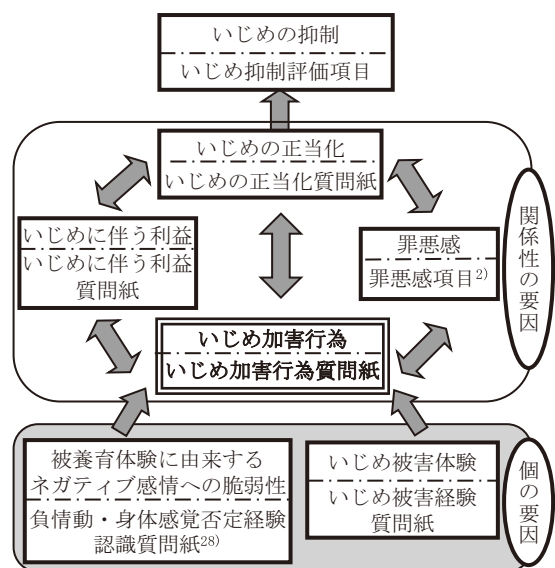


図2 仮説図に対応する質問紙

表1 質問紙作成のための予備調査の詳細

	調査時期	調査対象者	質問内容
予備調査Ⅰ： ①「いじめ加害行為質問紙」③「いじめに伴う利益質問紙」④「いじめの正当化質問紙」作成のための自由記述式質問紙調査	2014年7月3日～7月10日	大学生及び大学院生51名	(1) どのような行為を「いじめ」だと考えるか (2) もしもいじめを行うことやいじめる側に加わることで、いじめを行っている人が何らかの利益を得ているとしたら、それはどんなことか (3) もしもいじめを行っていた人が「自分は悪いことをした」と素直に思えないとしたら、それはなぜか
予備調査Ⅱ： 因子妥当性と信頼性の確認のための質問紙調査	2014年7月22日～8月9日	大学生及び大学院生206名	自作した「いじめ加害行為質問紙」「いじめに伴う利益質問紙」「いじめの正当化質問紙」の項目

で、「いじめ」と認識される行為について、自分がその集団の成員に対してどの程度行ったことがあるかどうかを回答してもらう質問紙である。「みんなで、叩いたり蹴ったりした」「仲間外れにした」など21項目について、「全くなかった」～「よくあった」の4件法で回答を求めた。

#### ②いじめ被害経験質問紙 (自作)

今まで所属していた集団 (学級や部活など) の中で、「いじめ」と認識される行為について、自分がその集団の成員からどの程度されたことがあるかどうかを回答してもらう質問紙である。作成したいじめ加害行為質問紙の項目を、「叩かれたり蹴られたりした」「持ち物にいたずらをされた」「仲間外れにされた」など、それらの行為を受ける側の視点に変更して使用した。「全くなかった」～「よくあった」の4件法で回答を求めた。

#### ③いじめに伴う利益質問紙 (自作)

「イライラした気持ちが落ち着く」「自分はいじめられないので安心できる」「自分には居場所がある」などいじめ行為をすることで感じる利益11項目について「全く感じていなかった」～「非常にそう感じていた」の5件法で回答を求めた。

#### ④いじめの正当化質問紙 (自作)

「やられている側にも非がある」「先生 (や周りの大人) が何も言わないからやっても良いだろう」などいじめ行為の正当化9項目について「全く感じていなかった」～「非常にそう感じていた」の5件法で回答を求めた。

#### ⑤罪悪感項目 (薊, 2010)

いじめ加害と認識される行為を行っていた時期、どの程度、罪悪感を感じていたかを回答してもらう項目である。この項目は、薊<sup>2)</sup>の恥と罪悪感に関する感情30項目に対して、因子分析を行った結果抽出された罪悪感因子9項目を、罪悪感項目として使用した。

「申し訳ない」「罪悪感を感じる」など全9項目に対して、「全く感じなかった」～「非常にそう感じた」の5件法で回答を求めた。

#### ⑥いじめ抑制評価項目 (自作)

いじめが抑制された状態を測る目的で、本間<sup>7)</sup>の「いじめ加害抑制理由」の質問項目を基に、いじめを抑制する心情からいじめ行為をやめたかどうかを評価する項目を作成した。「いじめても楽しくないからやめた」「友だちや仲間を大切にしたいからやめた」「いじめはよくないことだからやめた」など全13項目について「全く感じていなかった」～「非常にそう感じていた」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど、いじめが抑制された状態であるということを意味する。

#### ⑦負情動・身体感覚否定経験認識質問紙 (大河原ら, 2013)

大河原・猪飼・福泉<sup>28)</sup>が作成した質問紙で、様々なネガティブな情動と身体感覚を母親 (養育者) に表出した場面を想定し、その場面で母親 (養育者) がどの程度否定的だったかを測る質問紙である。情動に関しては、『私が不機嫌に怒ると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった (だろう)。』など5項目。身体感覚に関しては『私が「いやなにおいだ」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「いやなにおいだ」と言うと、母は「そんなことはない。いやなにおいなんかしないでしょ」と言った (だろう)』などの8項目から成っている。「全く思わない」～「非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。

## 2. 4 結果

### 2. 4. 1 質問紙の信頼性と妥当性の検討

作成した①いじめ加害行為質問紙、③いじめに伴う利益質問紙、④いじめの正当化質問紙は、それぞれ①、④が1因子構造、③は2因子構造が見出され、予



表2 いじめ加害行為質問紙の因子分析・信頼性分析

項目	I
相手の嫌がることを繰り返し言った。	.773
バカにしたりからかって笑い者にした。	.746
言葉でおどした。	.729
相手が嫌がることを無理にやらせた。	.720
仲間はずれにした。	.695
その人やその人が触れたものを避けた。	.680
わざと聞こえるように悪口を言った。	.677
遊びやグループでの行動に誘わなかった。	.657
わざと情報を共有しなかったり、ウソを教えたりした。	.653
持ち物を隠した。	.636
持ち物にいたずらをした。	.628
持ち物をわざと壊したり捨てたりした。	.626
「〇〇菌」などと言って面白がった。	.620
みんなで無視をした。	.608
持ち物に落書きをした。	.604
その人の悪い噂を流した。	.597
陰で悪口を言った。	.590
SNSなどネット上で悪口を書いた。	.519
お金や高価なものを要求した。	.445
SNSなどのグループからわざと外した。	.441
みんなで、叩いたり蹴ったりした。	.418
累積寄与率	39.598%
$\alpha$ 係数	.927

因子抽出法：主因子法

表3 いじめに伴う利益質問紙の因子分析・信頼性分析

項目	I	II
仲間として認めてもらえる。	.942	-.132
自分が仲間の一員だと実感できる。	.902	-.114
自分には居場所がある。	.830	-.014
仲間からよい評価を得ている。	.708	.088
自分はいじめられないので安心できる。	.706	-.053
仲間から支持を得ている。	.690	.149
共通の敵や目標ができクラスや友人グループの仲間意識が高まる。	.611	.148
自分はその集団の中で立場が上だという優越感がある。	.590	.202
ストレス発散になる。	-.061	.890
すっきりした気持ちになる。	-.024	.859
イライラした気持ちが落ち着く。	.097	.707
累積寄与率	62.249%	
$\alpha$ 係数	.917	.861
因子間相関	.499	

因子抽出法：主因子法

表4 いじめの正当化質問紙の因子分析・信頼性分析

項目	I
クラスや友人グループのためにやっていることだ。	.701
自分も同じようにやられた経験があるから、その人がやられるのも仕方のないことだ。	.656
自分はその人によって嫌な思いをしたのだから、やり返して当然だ。	.643
大人も同じようなことをやっているから自分も良いだろう。	.617
その人のために思ってやっているのだから、正しいことだ。	.596
そうしなければ自分がやられるので、自分を守るために仕方のないことだ。	.565
進んでやったわけではなく、自分はやらされただけだ。	.531
やられている側にも非がある。	.506
先生（や周りの大人）が何も言わないからやっても良いだろう。	.452
累積寄与率	34.836%
$\alpha$ 係数	.816

因子抽出法：主因子法

備調査と同様に十分な信頼性が得られた。また②いじめ被害経験質問紙、⑤罪悪感項目も1因子構造で十分な信頼性が得られた。⑥いじめ抑制評価項目については、分析の結果2因子構造が見出され、項目の作成において参考にした本問<sup>7)</sup>の調査と同様の2因子を見出すことができた。因子Iは、「自分が嫌なことは相手も嫌だからやめた」など、道徳的・共感的な理由からいじめの抑制が働くことを示した項目で構成された為、「道徳・共感的理由による抑制」と名付けた。因子IIは「見つかって先生に叱られるのが嫌だからやめた」など、自身の評価や叱責を回避するためなどの理由からいじめの抑制が働くことを示した項目で構成された為、「打算的理由による抑制」と名付けた。なお、因子名は本問<sup>7)</sup>を参考にした。そして、⑦負情動・身体感覚否定経験認識質問紙は、先行研究と同様に、「負情動否定経験認識」と「身体感覚否定経験認識」の2因子となり十分な信頼性が得られた。

## 2. 4. 2 いじめ加害行為の有無

いじめ加害行為質問紙から、どのいじめ行為についても「全くなかった」と答えた対象者をいじめ行為の加害が無経験であるものとし、加害行為経験の有無を算出した。その結果、いじめ加害行為を全く行っていない人が20.97% (82名)、いじめ加害行為を行ったことがあった人は79.03% (309名) であるというこ

とが分かった。

#### 2. 4. 3 性差の検討

各質問紙において性差が見られるかを検討するため、「いじめ被害経験質問紙」、「いじめ加害行為質問紙」、「いじめに伴う利益」の各因子、「いじめの正当化質問紙」、「罪悪感項目」、「いじめ抑制評価項目」の各因子、「負情動・身体感覚否定経験認識」の各因子について、 $t$ 検定を行ない男女の平均値の差について調べた。なお、「いじめに伴う利益質問紙」、「いじめの正当化質問紙」、「罪悪感項目」、「いじめ抑制評価項目」については、いじめ加害行為経験のない者を除いた309名を分析対象とした。

その結果、「いじめ加害行為」は1%水準で有意な差が見られ、男性の平均値が高かった ( $t(389) = 5.275, p < .01$ )。「罪悪感」についても1%水準で有意な差が見られ、女性の平均値が有意に高かった ( $t(307) = -2.687, p < .01$ )。「いじめに伴う利益質問紙」の「不快感情の処理因子」については5%水準で有意な差が見られ、男性の平均値が高かった ( $t(307) = 2.227, p < .05$ )。そして「いじめ被害経験」( $t(389) = 1.709, p < .10$ )と「いじめの正当化」( $t(307) = 1.671, p < .10$ )について10%水準で有意な差が見られ、どちらも男性の平均値が高かった。すなわち、「いじめ加害行為」、「いじめ被害経験」、「不快感情の処理因子」、「いじめの正当化」については、女性よりも男性の方が得点の平均が高く、「罪悪感」については男性よりも女性の方が得点の平均が高いという性差が見出された。

#### 2. 4. 4 仮説の検証

いじめ加害行為を行ったことがない82名を除いた309名を分析対象とし、構造分析モデリングによるパス解析を行った。「いじめ加害行為」と「集団からの承認」「不快感情の処理」「いじめの正当化」「罪悪感」が相互に影響を及ぼし合っていることを仮定した。さらに、個の要因である「いじめ被害経験」と「負情動・身体感覚否定経験」が「いじめ加害行為」の維持と抑制にどのように影響を与えるのかということについても探索的に分析を行った(図1)。なお、2. 4. 2に示したように性差が認められたので、男女別にパス図を作成した。

その結果、男性のモデルは適合度指標がGFI = .953, AGFI = .904, RMSEA = .042, AIC = 89.053, 女性のモデルは適合度指標がGFI = .959, AGFI = .914, RMSEA = .052, AIC = 96.458であった。以下に男女別に結果

を述べる。

#### [1] 男性 (図3)

男性 (N = 128) において、「いじめ被害経験」からは、「いじめ加害行為」「集団からの承認」「罪悪感」に有意な正のパスが示された。そして「負情動否定経験」からは、「いじめに伴う利益質問紙」の「不快感情の処理因子」に、「身体感覚否定経験」からは、「いじめの正当化」に有意な正のパスが示された。このことから、いじめ被害経験のある男性ほどいじめ加害を行い、集団からの承認を得られるという利益をより強く感じ、同時に罪悪感を持つ場合もあることがわかる。そして親から負情動を否定されてきた男性ほど、イライラした気持ちやストレスの処理としていじめを行う傾向があり、また親から身体感覚を否定されてきた男性ほど、いじめを正当化する傾向が強くなるということが示された。

そして関係性の要因においては、「いじめ加害行為」から「集団からの承認」と「不快感情の処理」に有意な正のパスが見出された。そして「集団からの承認」から、「いじめの正当化」に有意な正のパス、「いじめの正当化」からは「いじめ加害行為」に有意な正のパスが引かれ、「いじめ加害→集団からの承認→いじめの正当化→いじめ加害」という循環が見られた。さらに「集団からの承認」から「罪悪感」への正のパスも有意であり、「罪悪感」はいじめ抑制評価項目の因子である「道徳・共感的理由による抑制」と「打算的理理由による抑制」に正のパスを見出した。このことから、男性においてはいじめ加害を行うことで、イライラした気持ちやストレスを処理し、集団に居場所を見いだすなどという利益を感じる。いじめを行うことで集団から承認されると、いじめの正当化をして、それ

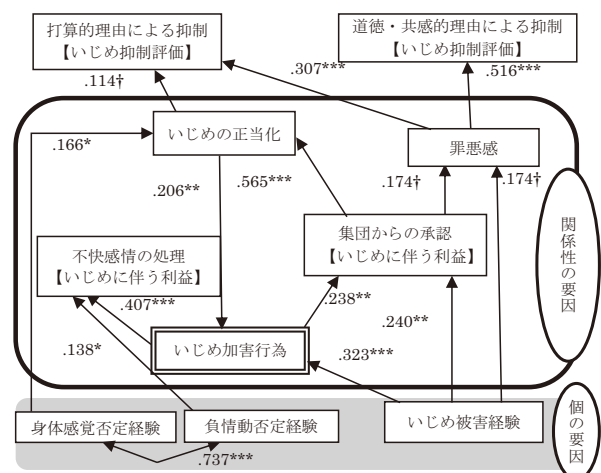


図3 パス解析結果 (男性)

がいじめ加害行為を強化することになる。一方、集団からの承認を得ても罪悪感を持つ場合もあり、いじめを正当化せずに罪悪感を持つと、被害者への共感的な気持ちによるいじめの抑制や「怒られるから」など打算的理由による抑制が働くということが分かった。

## [2] 女性 (図 4)

女性 (N = 181) について、「いじめ被害経験」からは「いじめ加害行為」「集団からの承認」「罪悪感」に有意な正のパスが示され、そして「身体感覚否定経験」からは「いじめの正当化」に有意な正のパスが示された。これは男性と一致した結果であったが、加えて女性では、「いじめ被害経験」から「いじめの正当化」へ正のパスが示され、「負情動否定経験」から有意なパスは見いだされなかった。このことから、いじめ被害経験のある女性ほど、いじめ加害行為を行い、集団に居場所を見出すなど集団からの承認を求め、いじめを正当化する。それと同時に罪悪感を持つ傾向も高まることが分かった。そして、親から身体感覚を否定されてきた女性ほど、いじめを正当化する傾向が高まることが分かった。

そして関係性の要因においては、「いじめ加害行為」からは、「集団からの承認」と「不快感情の処理」に有意な正のパスが示された。そして「集団からの承認」は「いじめの正当化」に有意な正のパス、「いじめの正当化」は「いじめ加害行為」に有意な正のパスを示すという循環が見られた。さらに「集団からの承認」は「罪悪感」への正のパスも有意であり、「罪悪感」はそれぞれ「道徳・共感的理由による抑制」と「打算的理由による抑制」に正のパスを見出した。これらの結果は男性のパス図と一致したものであった。

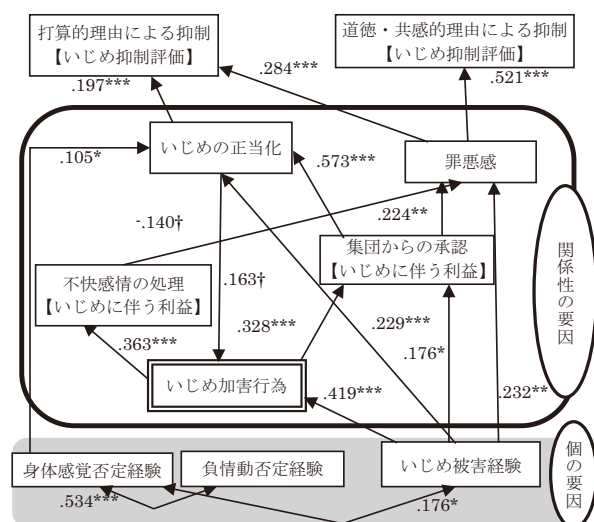


図4 パス解析結果 (女性)

加えて女性では、「いじめに伴う利益」である「不快感情の処理」が、「罪悪感」に有意な負のパスを示した。

このことから、男性と同様に女性も、いじめ加害を行うことで、イライラした気持ちやストレスを処理し、集団に居場所を見いだすなどという利益を感じる。いじめを行うことで集団から承認されると、いじめの正当化をして、それがいじめ加害行為を強化することになる。一方、集団からの承認を得ても罪悪感を持つ場合もあり、いじめを正当化せずに罪悪感を感じていると、被害者への共感的な気持ちによるいじめの抑制や「怒られるから」など打算的理由による抑制が働くということが分かった。また、女性の場合は、いじめによって不快感情を処理している場合、罪悪感を持ちにくくなるということも見出された。

## 3. 考察

### 3. 1 個の要因 (親との関係) のいじめ加害に与える影響

パス解析の結果において、男女ともに、親から身体感覚を否定されてきた経験は、いじめの正当化を強化するということが分かった。

大河原<sup>27)</sup>によると、子どもは被養育体験の中で、身体感覚としてのネガティブ感情の喚起に際して身体感覚に一致する認知情報 (感情語彙) を親から与えられ肯定されることによって、身体の安心感を獲得し、その安心・安全の体験を経てネガティブ感情は制御可能なものとなる。しかし、そこでネガティブな感情を否定される養育環境にあると、身体を流れるエネルギーとしての感情が言葉とつながらず、感情が社会化されないという。また猪飼・大河原<sup>11)</sup>は、親から身体感覚を否定された経験が解離傾向を促すということを明らかにしている。つまり、自分の身体感覚を否定されてきた子どもは、自身の身体感覚を一次解離の防衛を用いて切り離すことで親に適応することが必要となるのである<sup>29)</sup>。さらに一次解離の防衛で自身の身体感覚を制御することを求められてきた子どもは、自分の痛みを感じないように育っているため、必然的に他者の痛みも感じないということが起こる<sup>29)</sup>。

これらのことから、いじめをする子どもは、育ってきた環境の中で自身の身体感覚を一次解離するという方略を身につけているために「いじめは悪いこと」という指導をいくら受けても、「いじめられる方も悪い」「遊んでいるだけだ」などといじめの正当化することが出来てしまうのではないかと考えられる。



### 3. 2 個の要因 (いじめ被害経験) のいじめ加害に与える影響

本研究の結果から、男女共にいじめの被害経験は、いじめの加害行為に強く影響していることが示された。先行研究においても、いじめ加害を経験している者の方がそうでない者よりもいじめに関わりやすいという結果<sup>37)</sup>や、いじめ被害と加害の両方を経験している者のいじめ加害願望が高いこと<sup>7)</sup>などが示されており、それらと一致した結果となった。いじめ被害を経験したことでいじめ行為が抑制されなくなってしまう背景として、被害経験がある場合、いじめ加害をすることで「仲間の一員だと実感できる」「自分には居場所がある」など集団から承認されるという利益を感じやすい傾向があることが、男女共にパス解析の結果から明らかになった。いじめ被害を受けると、学級の中に自分に対して否定的な感情を持つ成員を作ること回避したい欲求を強め、過度な同調傾向や他者評価への過敏性に繋がることから<sup>19) 34)</sup>、いじめを受けたことによる傷つきや不安が加害集団への適応を高め、そこで集団からの承認を得ることでその不安や傷つきに対処しているということが考えられる。

### 3. 3 関係性の要因がいじめの維持に与える影響

パス解析の結果から、関係性の要因の中で、いじめ加害を行うことで所属集団から認められ、居場所を得ることが、いじめの正当化を促進し、いじめ加害行為を繰り返すことに繋がっていくという、いじめを維持・増幅する構造があるということが分かった。いじめの正当化がいじめ加害行為を高めるということについては、久保田<sup>19)</sup>においていじめ加害者の「いじめられていた子が自分勝手だったから」や「周囲のノリに合わせたから」などの“口実”が、いじめのエスカレート化に正の影響を及ぼしているという結果や、義達ら<sup>23)</sup>のいじめ加害者へのインタビュー結果でも示されている。

また、集団からの承認という利益を感じた時、いじめ行為の正当化に影響を及ぼすだけでなく、罪悪感を高める場合もあった。そして罪悪感はいじめの抑制を高めることが示された。これは、罪悪感が向社会的行動を促す要因となるものであるという知見と一致する<sup>6)</sup>。一方いじめの正当化は、打算的な理由によるいじめの抑制のみに影響を与えていた。本間<sup>7)</sup>は、いじめ停止に有意な影響を及ぼしているのは、道徳・共感的理由のみであるということ、さらに打算的理由は実際のいじめ停止にはマイナスの影響を与えているという結果を示し、いじめ被害や被害者への共感的な認

知や感情の大きさが実際のいじめ停止に結びつくとして述べている。つまり、いじめを正当化しているときは、親や先生の叱責など外的な統制がないといじめを停止できない状態だという可能性が示唆された。

これらのことから、集団からの承認という利益を感じた時、いじめの正当化を行うのではなく、罪悪感を安全に抱えていられることが、いじめの抑制に繋がるのではないかと考えられる。

### 3. 4 いじめ問題を解決するために

本研究においては、いじめをすることで集団から承認されるという利益が保証されることが、いじめをやめられない構造を生んでいること、さらに加害者の過去のいじめ被害体験がその構造を強化していることが分かった。

このことから、いじめ発生時の介入のポイントとして、加害者個々がいじめをすることで集団の中で得ている承認や地位に注目し、そこを成立させないようにすることが有効であると考えられる。それには、いじめに否定的な学級規範はいじめを抑制するという先行研究があるように<sup>30) 31)</sup>、中心となる加害者の周囲に働きかけていくことが、いじめることで集団から承認されるという利益を生まないことに繋がるだろう。また、集団の中で承認されるという機会を、いじめをしなくても学校生活の他の場面で得られるように大人が働きかけることも有効であると思われる。

それと同時に、背景にあるいじめ加害者の被害体験に目を向け、ケアをすることが重要である。いじめ被害を受けた子どもが学校で何事もなく過ごしたかのように適応し続けるためには、そこで感じているであろう不快感情を、一次解離により封印せざるを得ず<sup>29)</sup>、そこで封印された負のエネルギーが、集団からの承認や不快感情の処理などの利益の為にいじめをすることに繋がっていると考えられる。そのため、加害行為そのものの指導だけでなく、子ども自身がいじめ被害経験の傷つきやそれに伴う感情をそのまま素直に表現できるようにすること、つまり、子どもが感じないようにしてきたであろう不快感情に触れ、丁寧に承認していくことを通して、長期的な目で支援をしていく必要があると考える。

さらに本研究においては、親から自分の身体感覚を否定されることで一次解離の防衛を用いて切り離すことを身につけていることが、いじめの正当化を促進するということを述べてきた。このことからいじめの予防的視点として、日頃から子ども達が一次解離を使わなくてよいような関係性を、養育者をはじめとする周



周囲の大人が提供することが重要であると思われる。その関係性とは、「身体が感じている感情を發し、大人にその感情を承認され言語化され、安心する」というものである<sup>29)</sup>。大河原<sup>29)</sup>によると、幼少期から親との間でこの関係性が保障されていれば、「ネガティブな部分を持っている自分でも、まるごと愛してもらえる」という安心感が構築されているので、一次解離で適応するのではなく必要な時にSOSを發することができるという。

このような関係性があれば、例えいじめによって利益を感じる部分があったとしても、被害者への共感や罪悪感から、自身の加害行為を正当化しいじめを継続することは難しいのではないかと考える。また被害体験があった場合であっても、そのことを「辛かった」「苦しかった」と訴えることができ、「それはあって当然の感覚だ」と受け止めてもらえることで、加害に転じるのがなくなるのではないかと考える。

#### 4. 今後の課題

今回いじめ加害が抑制されない背景には、身体感覚を否定されるような被養育体験やいじめ被害体験、いじめに伴う利益やいじめの正当化という要因があることが分かったが、今回はいじめ行為に参与せずに行われる要因に焦点を当てることは出来なかった。本研究においても、いじめ加害も被害も経験したことがないと認識している者や、いじめ被害を受けても加害をしなかったと認識している者が一定数いることが明らかになっており、いじめに巻き込まれずにいられる対象者も少なからずいることを示している。このような対象者がいじめに巻き込まれずにいられる理由を明らかにすることは、いじめの予防的対策に重要な視点であり、今後さらなる研究が必要であると考えている。

#### 付記

本稿は第2執筆者の指導の下に、第1執筆者が東京学芸大学大学院修士論文（平成26年度）として提出したものをまとめ直したものである。調査にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 朝倉隆司：中学生におけるいじめに関わる役割行動と敵意的攻撃性、共感性との関連性 学校保健研究, 46, 67-84, 2004.
- 2) 薊理津子：屈辱感、羞恥感、罪悪感の喚起要因としての他者の特徴 パーソナリティ研究, 18 (2), 85-95, 2010.
- 3) Deci, E. L., & Ryan, R. M.: Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum, 31-46, 1995.
- 4) 海老澤景子：なぜ人はいじめてしまうのか？－いじめ体験についての質的研究－ 東京学芸大学卒業論文, 2008.
- 5) G. M. Sykes and D. Matza: Techniques of Neutralization: A Theory of Delinquency, *American Sociological Review*, 22(6), 664-670, 1957.
- 6) 久崎孝浩：幼児の恥と罪悪感に関連する行動に及ぼす発達の要因の影響 心理学研究, 76 (4), 327-335, 2005.
- 7) 本間友巳：中学生におけるいじめ停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究 51, 390-400, 2003.
- 8) 本間友巳（編著）：いじめ臨床 歪んだ関係にどう立ち向かうか ナカニシヤ出版, 2008.
- 9) 坂本亨：子どもの仲間関係が育む親密さ－仲間関係における親密さといじめ（親密さの心理）－ 現代のエスプリ 至文堂, 43-51, 1996.
- 10) 藤圭・湯川進太郎：満たされない自己が敵意的認知と怒り感情に及ぼす影響 カウンセリング研究, 38, 22-32, 2005.
- 11) 猪飼さやか・大河原美以：母からの負情動・身体感覚否定経験が自傷行為に及ぼす影響：解離性体験尺度DES-IIとの関係 東京学芸大学紀要 総合教育研究科 I 64, 171-178, 2013.
- 12) 井ノ崎敦子・野坂祐子：大学生における加害行動と攻撃性との関連 学校危機とメンタルケア, 2, 73-85, 2009.
- 13) 市井桃子・永浦拓・飯尾有未・富永良喜：いじめ加害行動とストレスおよび同調傾性との関連 発達心理臨床研究 18, 65-74, 2012.
- 14) 伊藤正哉・小玉正博：自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85, 2005.
- 15) 伊藤正哉・小玉正博：大学生の主體的な自己形成を支える自己感情の検討－本来感、自尊感情ならびにその随伴性について 教育心理学研究, 54, 222-232, 2006.
- 16) 香取早苗：過去にいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, 32, 1-13, 1999.
- 17) 国際教育政策研究所：いじめ追跡調査2010-2012 いじめQ&A 生徒指導・進路指導研究センター, 2013.
- 18) 久保田真功：いじめを正当化する子どもたち－いじめ行為の正当化に影響を及ぼす要因の検討－ 子ども社会研

- 究, 9, 29-41, 2003.
- 19) 久保田真功: いじめはなぜエスカレートするのかーいじめ被害者の利益に注目してー 教育社会学研究第92集 107-127, 2013.
- 20) 松尾直博: 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向: 学校・学級単位での取り組み 教育心理学研究 50 (4), 487-499, 2002.
- 21) 文部科学省: いじめ防止対策推進法 (平成25年法律第71号) 2013年6月28日 <[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1337278.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1337278.htm)> (2015年1月16日).
- 22) 森田洋司・清永賢二: 新訂版 いじめ 教室の病 金子書房, 2001.
- 23) 義達理絵・佐野秀樹: 教師のいじめへのかかわり方ーいじめ被害経験者の面接を通してー 東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅰ, 64, 195-203, 2013.
- 24) 岡安孝弘・高山巖: 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421, 2000.
- 25) 大河原美以: 怒りをコントロールできない子の理解と援助 教師と親の関わり 金子書房, 2004.
- 26) 大河原美以: 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (1)ー「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性ー 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 61 (1), 121-135, 2010.
- 27) 大河原美以: 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (2)ー感情制御の発達と母子の愛着システム不全ー 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 62 (1): 215-229, 2011.
- 28) 大河原美以・猪飼さやか・福泉敦子: 母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の作成: 因子妥当性と信頼性の検証 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 64 (1), 163-169, 2013.
- 29) 大河原美以: 子どもの感情コントロールと心理臨床 日本評論社, 2015
- 30) 大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和: 児童・生徒の教師認知がいじめの被害傾向に及ぼす影響ー学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目してー 教育心理学研究, 57, 324-335, 2009.
- 31) 大西彩子・吉田俊和: いじめの個人内生成メカニズムー集団規範の影響に着目してー 実験社会心理学研究, 49, 111-121, 2010.
- 32) 芹沢俊介: 「いじめ」が終わるとき 彩流社, 2007.
- 33) 谷本泰子・笠井達夫: 青年期における人間信頼感・自己存在感と攻撃性の関連 徳島文理大学研究紀要, 76, 65-79, 2008.
- 34) 山本淳子・田上不二夫: 思春期における評価懸念と承認欲求との関連 カウンセリング研究, 40 (2), 12-22, 2007.
- 35) 吉川延代・今野義孝・会沢信彦: いじめの被害ー加害経験と自尊感情との関連ー大学生を対象にした週及的調査ー 人間科学研究, 34, 169-182, 2012.
- 36) 湯川進太郎: 自己存在感と攻撃性 カウンセリング研究 35, 219-228, 2002.
- 37) 遊間 義一: 大学生におけるいじめの被害・被害行為の継続性と流動性 犯罪心理学研究 52 (1), 17-30, 2014

# いじめとその維持要因に関する研究

## A Study of Factors Contributing to the Maintenance of Bullying

岩 見 まりあ<sup>\*1</sup>・大河原 美 以<sup>\*2</sup>

Maria IWAMI and Mii OKAWARA

臨床心理学分野

### Abstract

The purpose of this study was to verify factors that contribute to the maintenance of bullying from the viewpoint of the individual factors of “victims of bullying” and “invalidation of negative emotion and somatic sensation by mother,” and the relational factors of “the benefits of being bullied,” “justification of bullying,” and “guilt of bullying.”

Consequently, the benefit of bullying in terms of relational factors is that if the victim is accepted as one among the group then this can control justification of bullying and can maintain bullying. Also, regarding individual factors, it was found that the invalidation of somatic sensation by mother controls the justification of bullying, and that other victims of bullying experienced in the past strongly control bullying.

**Keywords:** bullying, the benefits for bullying, justification of bullying, negative emotion, somatic sensation

*Department of Clinical Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本研究の目的は、いじめ加害の維持に影響を与える要因について、“個の要因”である「いじめの被害体験」「母からの負情動・身体感覚否定経験」と、“関係性の要因”であるいじめ加害者の「利益」「罪悪感」「正当化」という観点から検証することである。

その結果、“関係性の要因”において、いじめを行うことで集団から認められることが、いじめの正当化を促進し、いじめの維持に影響を及ぼしていることが明らかになった。そして、“個の要因”において、母からの身体感覚否定経験はいじめの正当化を促進すること、背景にいじめの被害体験があることがいじめ加害行為を促進していることが分かった。

**キーワード:** いじめ、いじめに伴う利益、いじめの正当化、負情動、身体感覚

---

<sup>\*1</sup> Sagamihara Youth Counseling Center (3-13-3 chuo, chuo-ku, Sagamihara-shi, Kanagawa, 252-0239, Japan)

<sup>\*2</sup> Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)